

滋賀県戦争遺跡分布調査報告書

平成 30(2018)年 3 月

滋賀県平和祈念館

滋賀県立大学 中井研究室

序

滋賀県平和祈念館は平成 24 年 3 月に開館し、今年 3 月に 6 周年をむかえました。この間、「モノと記憶の継承」「自らできることのきっかけづくり」「県民参加型の運営」という三つの基本理念のもとで、多大な犠牲をともなったあの戦争に関する展示・資料収集・普及啓発・平和学習支援・ボランティア活動支援などの事業を展開してまいりました。

他の府県にお住いの方々に比べると滋賀県の戦争被害は小さかったかもしれませんが、空襲や戦争に関わる事故などで死傷された方は少なからずおられます。また、大津市や東近江市には大規模な軍事施設もありました。そして、徴兵や勤労働員、戦中戦後の耐乏生活といった戦時の苦難はひとしく経験してきたところです。

本書は、現代にわずかでも残されている戦争の痕跡を「戦争遺跡」ととらえ、できるだけ網羅的に調査し、空襲・軍事施設・避難壕の 3 つのテーマに分けて現状を記録したものです。これらの遺跡とともに戦争の苦難の記憶を次世代に継承し、その一助として本書をご活用いただければ望外のよろこびです。

最後になりましたが、滋賀県立大学の中井均さんと調査を実施してくださったみなさん、そして調査にご協力くださった関係者・関係機関のみなさまに、心よりお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

滋賀県平和祈念館

館長 端 信 行

例 言

1. 本書は、平成 28 年度に実施した滋賀県戦争遺跡分布調査の調査報告書である。
2. 調査は、滋賀県が滋賀県立大学の研究委託事業として実施した。
3. 調査の組織は下記の通りである。

代表 中井均(滋賀県立大学人間文化学部教授)

調査員 橘尚彦

水谷孝信

辻川哲朗

神保忠宏

振角卓哉

下高大輔

調査補助員 杉山佳奈、西澤光希(滋賀県立大学大学院)

島田章広(滋賀県立大学研究生)

河本愛輝、村田亮、井内南奈香、佐藤佑樹、柴田慎平(滋賀県立大学)

事務局 伊庭功(滋賀県平和祈念館)

4. 戦争遺跡の項目については滋賀県の状況より、1.空襲、2.軍事施設、3.避難壕とした。
5. 執筆については各項目の文末に執筆者名を記している。

目次

序文

例言

はじめに 1

第1章 空襲

1. 園城寺法明院 柱に残る爆弾破片痕 3
2. 城南小学校(旧城南国民学校)の爆弾破片痕 5
3. 旧鐘紡長浜工場の機銃掃射痕 7
4. 防空色を施した土蔵 9
5. 明光寺 本堂に残る銃弾痕 10
6. 旧柏原村穀物倉庫 11
7. 守山駅空襲で被弾した六地蔵 13

第2章 軍事施設

1. 歩兵第九連隊 火薬庫跡 15
2. 大津陸軍墓地 17
3. 陸軍大谷射撃場 29
4. 大津海軍航空隊 32
5. 大津海軍航空隊 射撃場 37
6. 大依山射撃場監的壕 39
7. 北ノ庄八幡射撃場監的壕 41
8. 野田沼捕虜収容所(大阪捕虜収容所第23分所(野田沼分所)) 43
9. 饗庭野演習場 廠舎 45
10. 冲原神社・飛行第三連隊門柱 47
11. 八日市飛行場 戦闘準備線 49
12. 八日市飛行場 布引掩体群 51
13. 芝原揚水機場 54
14. 中部憲兵隊司令部 京都地区憲兵隊 伏見分隊 八日市分遣隊 55
15. 八日市鉄道 飛行場前駅(御園駅) 57
16. 八日市飛行場 平林射撃場 59
17. 磯山射撃場監的壕 63
18. 米原俘虜(連合軍捕虜)収容所の水道枡 66

第3章 避難壕

1. 旧逢坂山隧道 疎開工場跡 68
2. 旧佐和山隧道(近江航空疎開工場) 70
3. 旧観音坂隧道 71

4. 旧横山隧道	72
5. 機関車避難壕	73
おわりに	78
附1 滋賀県戦争遺跡一覧表	79
附2 滋賀県戦争遺跡分布図	86

はじめに

戦争遺跡とは、「近代以降の日本の国内・対外(侵略)戦争とその遂行過程で形成された遺跡である。したがって調査研究の対象地域は国内の戦争遺跡(戦時下の日本国民の生活も含まれる)はもちろんのこと、朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、南太平洋地域、すなわちアジア・太平洋全域に残されている遺跡にまで及ぶ」と定義されている。1931年に起こった満州事変以降、1945年に至るいわゆる15年戦争は国民を巻き込む総力戦体制となり、全国に軍の施設、軍需工場が造営された。しかしこうした施設は戦後数多くが解体、破壊され、その姿を残すものはなほだ少なくなってきている。戦後こうした戦争にかかわる施設の解体や破壊についての抵抗感などなく、むしろ戦争にかかわるものとして消去することが優先さえされてきた。一方で負の遺産として保存することもおこなわれてきた。その代表が広島県の実験ドームである。実験ドームは1995年に国史跡に指定され、翌1996年には世界遺産に登録されている。

さらに戦後50年を経た段階で、戦争にかかわる施設を戦争遺跡、あるいは軍事遺跡と呼称し、その保存が議論されるようになる。そうしたなかで1990年に陸軍病院南風原壕群が南風原町の史跡に指定され、文化財としての遺跡として認識されるようになった。

さらには埋蔵文化財として発掘調査が実施されるようになる。もちろん戦争遺跡そのものが周知の遺跡として調査されるのではなく、別の遺跡の発掘に際してその上層遺構として調査されたものである。宮城県の仙台城では第2師団の遺構が検出されるとともに数多くの軍隊食器が出土している。大阪府の大阪城では第4師団の遺構が検出されるとともに認識票が出土している。

このような戦争遺跡で注目される発掘調査が沖縄県の陸軍病院南風原壕群の調査と、静岡県第二海軍技術廠牛尾実験所遺跡の調査であろう。陸軍病院南風原壕群の調査によって戦争遺跡のもつ重要性が認識され、戦争遺跡も発掘調査の対象としなければならない指標となった意義は大きい。第二海軍技術廠牛尾実験所遺跡は調査前にこの遺跡自体を周知の遺跡として文化庁に届け出、他の遺跡に伴っての調査ではなく、戦争遺跡第二海軍技術廠牛尾実験所遺跡として調査されている。

また、都道府県単位で現存する戦争遺跡の現状を把握する目的で、分布調査がおこなわれるようになる。沖縄県では1998年に実施され、報告書が刊行されている。一方、三重県では三重県歴史教育者協議会が主体となって報告書が刊行されている。また、大分県では西南戦争の戦争遺跡の分布調査を実施しており、県内の山間部に残る薩軍、官軍の壕跡が網羅されている。

滋賀県では八日市の飛行機掩体、米原の機関車避難壕などが知られていたが、その実態はまったく把握されていなかった。発掘調査では彦根市の出路遺跡で焼夷弾が出土したほか、多賀町の久徳遺跡の発掘調査で海軍木曾飛行場の滑走路路面が検出された事例が報告されている。

なお、滋賀県では昭和59(1984)年に県遺族会の要望を契機として、戦没者遺品館という名称で県議会にて議論され、その結果、平成2年度には平和祈念館(仮称)基本構想検討懇話会が設けられた。

そして 2012 年には旧愛東町役場を利用した平和祈念館が開館している。この平和祈念館でいつも話題となったのが八日市の掩体である。滋賀県の代表的な戦争遺跡であるにもかかわらず文化財としての指定もなされておらず、さらに県内には多くの戦争遺跡があるにもかかわらずその所在地すら不詳のものもあるという現状から、早急に分布調査を実施し、その把握に努めることとなり、平成 28(2016)年度に分布調査を行うこととなった。

調査については、滋賀県平和祈念館の運営委員でもある滋賀県立大学人間文化学部の中井均に依頼があり、滋賀県と滋賀県立大学との間で研究委託契約を締結して実施することとなった。

(中井)



法明院本堂大玄関の爆弾破片による傷跡（上 本堂大玄関、下 向かって左の柱に残る傷跡）

2. 城南小学校（旧城南国民学校）の爆弾破片痕

◆場 所 彦根市西今町

◆現 況 小学校

◆遺構の状況

彦根市立城南小学校は明治 8(1875)年の創立。明治 25(1892)年に福満尋常小学校、昭和 16(1941)年に福満国民学校と改名したあと、昭和 18(1943)年に城南国民学校、昭和 22(1947)年に城南小学校と改名して現在にいたる。

昭和 20(1945)年 6 月 26 日 9 時 30 分頃、城南国民学校付近に米軍機 B29 が多くの爆弾を投下した。岐阜方面を目標にした B29 の編隊に迎撃の日本軍戦闘機が体当たりし、搭載していた爆弾十数発が付近に落下したと思われる。昭和 20(1945)年 12 月に作成された『戦災概況図 彦根』（第一復員省資料課 1945 発行 国立公文書館蔵）には、城南国民学校付近から北西へ点々と 16 カ所の着弾箇所が記されており、被害が広範囲におよんだことがうかがえる。季節柄、多くの農家の方が麦刈りに出ていたため、10 人の犠牲者と多くの負傷者が出た。

この爆撃で城南国民学校では屋根瓦が吹き飛び、東校舎には多くの爆弾破片が突き刺さった。水野道子氏から平和祈念館に提供された卒業写真には、爆風で割れた窓ガラスが失われた状態で写っている。

現在も校庭に残されているロダンの「考える人」像の台座には、この空襲で飛び散った爆弾の破片による傷が残っている。（振角）



位置図〔平成 29 年 12 月 18 日彦都第 10372 号の承認により都市計画図白地図を使用。〕



「戦災概況図 彦根」(国立公文書館 所蔵)



「考える人」像台座の傷



城南国民学校 昭和 20 年度の卒業写真 (水野道子氏提供)

3. 旧鐘紡長浜工場の機銃掃射痕

- ◆場 所 長浜市鐘紡町 1-11
- ◆現 況 KB セーレン長浜工場倉庫棟
- ◆遺構の状況

昭和 5 (1930)年操業の鐘紡長浜工場は現在 KB セーレン長浜工場になっているが、工場棟のほとんどが戦中のままで現存し、一部の鉄骨部分に艦載機空襲による機銃掃射痕が複数残る。新聞報道では昭和 20(1945)年 7 月 28 日午前 7 時すぎ、パラシュートなどを製造する軍需工場であった鐘紡長浜工場が艦載機空襲を受け、『長浜市二十五年史』(長浜市 1967)では小型爆弾が燃糸工場男子休憩所と第二機械工場に数個投下され、屋根と窓ガラスが破損、製品倉庫の屋上監視所にいた監視硝の西畑栄次郎氏が被弾、戦死となっている。

昭和 22(1947)年 11 月の米軍撮影空中写真では迷彩の跡が残る屋根の一部が新しく張り替えられていて、その部分が被爆箇所であったことがわかる。監視所がどこにあったのかはわからないが、機銃掃射の被弾痕は被爆箇所の屋根の右寄りの屋内の鉄骨部分にある。北方向、北西方向からの機銃掃射で銃弾の跳弾痕、貫通痕、かすった痕などが残っている。

虎姫中学 3 年の干拓動員学徒だった中島孝治さんが、長浜駅前で当日の朝に撮影した米軍機の写真では、鐘紡長浜工場を襲ったのは戦闘機の「グラマン」ではなく「SB2C」(カーチスヘルダイバー)という複座の艦上爆撃機だったことがわかっている。編隊ではなく単独機の攻撃と思われるが、同日のアメリカ海軍第 38 任務部隊の大規模な艦載機空襲の作戦の一部であったことは疑いがない。(水谷)



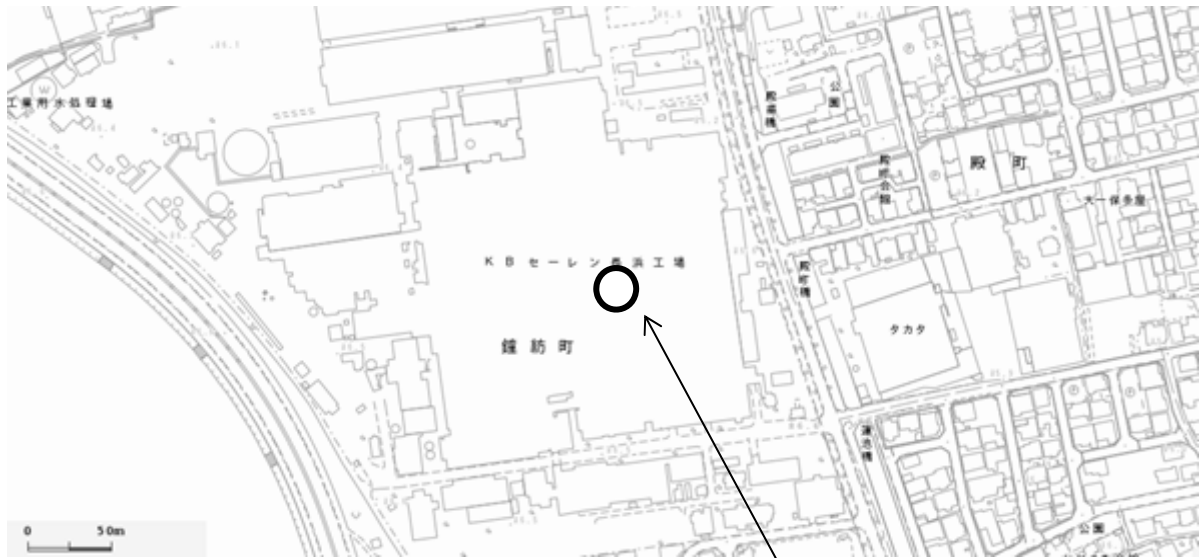
1947 年 11 月米軍撮影 USA-R586-9 を拡大

屋根が張り替えられた被爆箇所



長浜を空襲した艦載機

中島孝治さん撮影

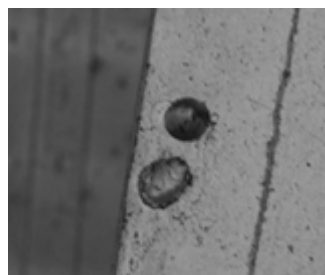
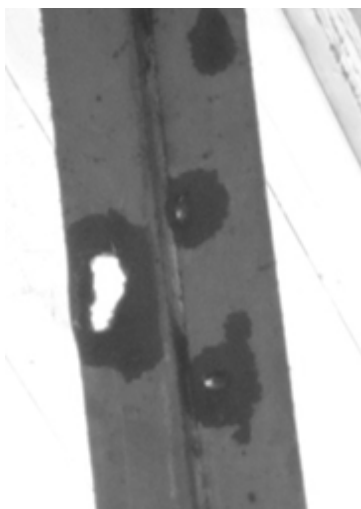
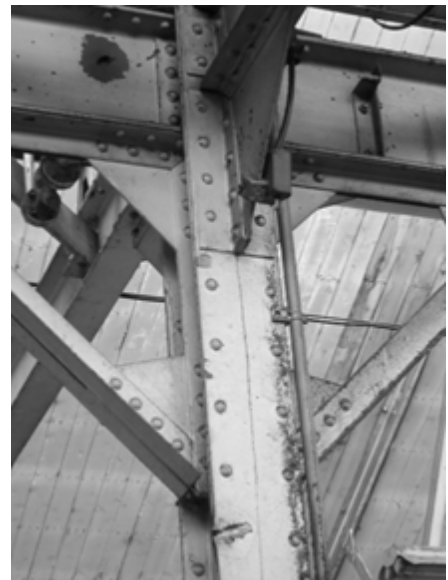


位置図〔平成 29 年 12 月 14 日長都計第 346 号の承認により都市計画図白地図を使用。〕

機銃掃射痕



昭和 5 年の建設当時のままの鉄骨



4. 防空色を施した土蔵

◆場 所 長浜市西浅井町塩津浜

◆現 況 個人住宅

◆遺構の状況

長浜市西浅井町塩津浜に位置し、寛政 5(1793)年に建造された土蔵である。ここは琵琶湖水運最盛期に敦賀屋の屋号で宿屋を営んでおり、高級な常連客が主流であった。そのため、中庭には近江を代表する庭園のひとつである百日紅の大木がある。

壁の上部が黒く塗られているのは、太平洋戦争時に白壁は敵機に分かり易いので黒く塗るべしとの命令で塗られた名残である。

現在、運船問屋を営んだことを示す看板が残るほか、生活用品具入れとして使用されている。(案内板より)



5. 明光寺 本堂に残る銃弾痕

◆場 所 米原市朝妻筑摩

◆現 況 寺院

◆遺構の状況

朝妻筑摩の集落に位置する明光寺の本堂には戦争時の銃弾痕が残っている。

東向きの本堂入り口の柱、床に近いところをかするようにして柱をえぐっている。近所の方によると、境内の桜に銃弾が刺さっていたことを覚えておられた。

空襲時の詳しいことは不明だが、おそらく昭和20(1945)年7月下旬から8月にかけて米原駅を襲った空襲の被害であろうと思われる。(振角)



位置図〔平成29年12月11日米都計第357号の承認により都市計画図白地図を使用。〕



明光寺本堂



本堂右扉の柱



迷彩塗装された農業倉庫

7. 守山駅空襲で被弾した六地藏

◆場 所 守山市吉身六丁目

◆現 況 墓地

◆遺構の状況

米軍の機銃弾を浴びた六地藏が所在する墓地は吉身六丁目にある。現在は周囲に住宅がひしめく街の中にあるが、当時は守山の宿場町から離れた田んぼの中にあった。

昭和 20(1945)年 7 月 30 日の午後 4 時頃、大津・滋賀海軍航空隊を襲った米軍艦載機の一部が守山に飛来して、守山駅を発車したばかりの列車に機銃掃射をしかけた。この空襲の目標は機関車であったようだが、列車に乗車していた兵士・民間人と周辺住民に 11 名の犠牲者と多数の負傷者が出ている。

砂岩製の 6 体の地蔵像にはすべてに機銃掃射によると思われる欠損が認められる。一部が粉碎したようすは見受けられず、どの傷も弾丸の衝撃で一部が欠けたものである。像の頭部が小さく欠損するものもあるが、6 体とも像部分は完存しているので、交換されることなく残されたのだろう。
(振角)



位置図〔この資料は、守山市長の承認を得て、同市発行の地形図 1/2500 を使用し、複製したものである。
(承認番号 平成 30 年 守都計第 101 号)〕



被弾した六地藏

第 2 章 軍事施設

1. 歩兵第九連隊 火薬庫跡

◆場 所 滋賀県大津市園城寺町

◆現 況 山林

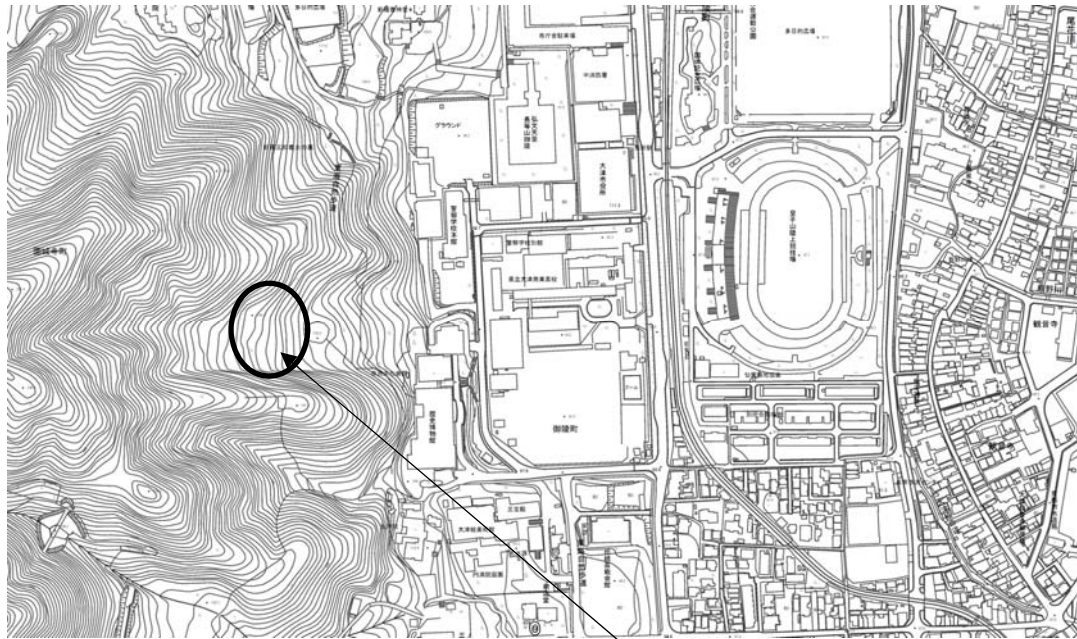
◆遺構の状況

大津歴史博物館および市民文化会館西側の山手は、明治 7(1874)年から昭和 9(1934)年まで存在した陸軍歩兵第九連隊の兵営西端辺に隣接する位置である。明治 43(1910)年測図の「大津」(陸軍測量部作成)の同地には火薬庫の地図記号が東西に 2 か所表記されている。

火薬庫跡は斜面に沿って西から東に数段の削平地を設けており、東端に位置する平坦地が最も広い。この削平地は北から東側にかけて高さ 1.5~4m 程度の土塁が存在し、火薬庫を囲んでいた爆発時の衝撃波および延焼防止用の土堤と推定される。また、平坦地南東隅と北東隅に開口部が存在し、南西隅の開口部はそのまま傾斜路となるため当時の弾薬の運搬路と考えられる。

さらに、この平坦地内には南西隅に水槽遺構、中央やや北よりに建物基礎遺構と集水枡状遺構が存在する。水槽遺構はコンクリート製で、周囲には煉瓦や加工された石材が山積している。建物基礎は南北約 6m×東西約 16.7m の長方形で、南側に入口と思われる南北約 2m×東西約 4m の張り出しが存在する。基壇北辺のみコンクリート製で、他の三辺は花崗岩製となる。床下にアーチ状の換気口が存在し、内部には煉瓦製の支柱も確認できる。コンクリート製の北辺のみ換気口の上に小型の換気口が存在する。小型の換気口は長方形で蝶番と掛け金具が残り、扉があったと推定される。周辺には瓦やモルタル製の外壁、ボルトや雨樋用の金具などが散乱している。集水状遺構は花崗岩製で西方向に溝が伸びているが用途は不明である。

明治期の地図や土堤から火薬庫の存在は確実であるものの、建物基礎遺構の周辺の遺物からは現在残された基礎が火薬庫の基礎であるとは想定しがたい。第九連隊移転後の昭和 17(1942)年に開設された陸軍少年飛行兵学校の配置図には同地に、無記名ながらも同様の平面を持つ建物が描かれていることから、第九連隊時代に火薬庫が置かれた跡地を利用して別の施設が建てられた可能性が高い。(河本)



位置図〔大津市統合型 GIS 基盤地図(1/2500)を使用〕 火薬庫跡

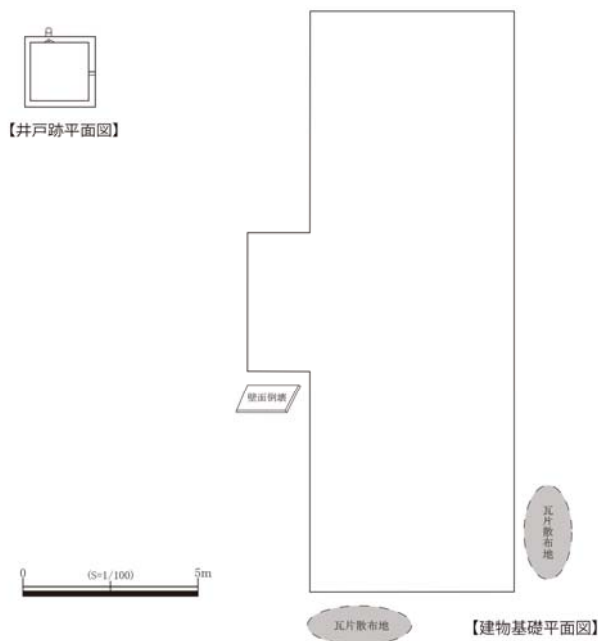


写真 建物基礎下部

図 火薬庫跡並びに井戸跡平面図



写真 火薬庫跡を囲う土塁



写真 当時の様子。奥の建物が火薬庫と思われる。
(大津歴史博物館 所蔵)

2. 大津陸軍墓地

◆場 所 大津市皇子が丘 1 丁目

◆現 況 墓地

◆遺構の状況

位 置 本墓地は、歩兵第九連隊大津営所に伴う陸軍墓地である。比叡山東麓の丘陵斜面に位置する。現在は、敷地に東接して国道 161 号バイパスが南北へ走り、視界を遮っている。しかし、かつては墓地の眼前に琵琶湖と湖南地域を一望できる風光明媚な立地であったはずである。

現 状 現状では、丘陵斜面を上下 2 段の平坦面（以下、上段平坦面・下段平坦面）に造成し、その各所に個人墓を列状に配置したまとまりが確認できるほか(図 1)、各段には合葬碑・慰霊碑等も建立されている。ただし、こうした現状は本来のものではなかった。国道 161 号バイパス建設前には、さらに東側へ平坦面が広がっていたが、戦後計画されたバイパス工事予定地内に墓碑群の一部が含まれたので、バイパス建設のさいに北側へ敷地を拡張し、そこへ下段平坦面のさらに東方にあった最下段の個人墓群が移設されているからである。

現状では、上段平坦面には、「日清日露第一次第二次世界大戦各戦役戦没之英霊供養塔」(昭和 55 年建立、図 1-G)・「明治三十七八年戦役将校同相当官戦病死者合葬碑」(明治 39 年建立、図 1-D)・「大正四年乃至九年戦役戦病死者之碑」(大正 11 年建立、図 1-C)・個人墓(士官墓とその家族墓)が配置されている。その東側の下段平坦面には、「大東亜戦戦没者之碑」(昭和 41 年建立、図 1-F)や、「明治三十七八年戦役下士戦病死者合葬碑」(明治 39 年建立、図 1-A)・「明治三十七八年戦役准士官戦病死者合葬碑」(明治 39 年建立、図 1-B)・「明治三十七八年戦役兵卒戦病死者合葬碑」(明治 39 年建立、図 1-D)の階級別合葬碑 3 基のほか、「超日月光霊土」碑(図 1-H)・「天 霊土」碑(昭和 52 年建立、図 1-J)・太子地藏尊(図 1-E)等が配置されるとともに、平坦面の各所にいくつかのグループに分かれて個人墓(下士墓・兵卒墓)が配されている。

個人墓の内容 以下、上・下段平坦面にある個人墓(569 基)の内容を記述する。これらの個人墓については、現状での配置状況から、仮に墓碑群を大きく 8 つのグループ(A~H 区、写真 1)に大別したうえで、それぞれの内容について概述する。

また、以下の記述では、墓碑形態について、碑身の形態—とくに頂部形態と断面形態から、尖頭方柱式(側面から見ると頂部が尖り、身の断面形態が正方形を呈するもの)と、円頭扁平柱式(側面から見ると頂部が円弧を描き、身の断面形態が長方形を呈するもの)の 2 類に大別した。さらに、碑身をのせる基壇部は 1 段のものと 2 段のものがあり、それぞれ基壇 1 段構成・2 段構成と呼びわけた。

なお、墓群は列をなして配置されることを基調とする。1 基のみの I 区と、一列に配置された H 区以外は複数条の列をなして配置されている。そこで、H 区以外の各群については配置模式図を示し、短辺側に「イロハ」を、長辺側に数字をそれぞれ付し、各個体を「地区-短辺-長辺」として識別した。また、H 区は図 1 に配置状況を示し、個々の墓碑を「地区-番号」として呼称することにした。

【A 区】(図 2)下段平坦面の西より、ほぼ中央部に位置する。現状では個人墓 19 基を確認でき、おもに下士官墓である。いずれも碑身は尖頭方柱式で、基壇は 2 段構成である。一例を示した(A-イ-4)。碑銘の没年には幅があり、特定の戦役に伴う墓域とは考えにくい。なお、個人墓はいずれも東面し

ており、その前面には「大東亜戦戦没者之碑」(図 1-J)がある。

【B区】(図 3)下段平坦面の西より、A区の北東側に位置する。現状では、18基を1列とし(イ列は14基)、12列が配置される。その中には6基分を空けてつくったスペースがあり、そこに士官候補生墓1基を配置しており、合計207基となる。いずれも東面する。士官候補生墓1基を除くと、それ以外はすべて兵卒墓である。なかでも明治28年の没年の事例が多く、日清戦争時の兵卒戦病死者の墓域とおもわれる。これら兵卒墓の形態は、碑身が尖頭方柱式で、基壇は1段構成であり、碑身石材は砂岩、基壇部は花崗岩である。正面には「階級・氏名」が、左面には「戦没年月日・場所」が刻まれる。図に一例を示した(B・ヌ-16)。一方、1基のみの士官候補生墓(B・*・*)は、碑身形態が尖頭方柱式、基壇が2段構成で、碑身石材は花崗岩である。

【C区】(図 4)下段平坦面のB区の東側に位置する。現状では37基の個人墓を確認できる。いずれも南面する。これら個人墓の形態は、碑身が尖頭方柱式で、基壇は2段構成であり、碑身・基壇ともに石材は花崗岩である。ここでは2例を示した(C・ハ-1・C・ニ-1)。碑銘にはバリエーションがある。C・ハ-1の場合、正面に姓名のみ、右面に没年と思われる年月日、左面には複数行の文章(表面の剥落が著しく判読できない例が多い)を刻する。一方、C・ニ-1では、正面に階級+氏名、裏・左面に経歴と目される複数条の文章(表面の剥落が著しく判読困難)が示されている。

【D区】(図 5)下段平坦面の北よりに位置し、バイパス工事のさいに移築されたと考えられる一群である。現状では個人墓143基を確認できる。いずれも東面する。碑銘等からみて、平時に病死した兵卒墓のエリアであろう。これら個人墓の形態は、以下の3種類に大別できる。まず、最西側列の5基(D・リ-1~5)は円頭扁平柱式基壇2段構成で、碑身・基壇ともに石材は花崗岩である。ここでは1例を示した(D・リ-1)。本例の碑銘は、正面に氏名、裏面に経歴が示されるもので、裏面の経歴から明治5(1872)年4月27日に大阪鎮台彦根営所にて病没したことが分かり、第九連隊大津営所成立以前のものである。それら以外の諸例については、碑身形態が尖頭方柱式で、石材が花崗岩である点では共通するけれども、基壇構成は異なる。つまり、東側3列(イ~ハ列)は基壇が1段構成であるのにたいして、その他の5列(ニ~チ列)とリ列の一部(D・リ-6~9)は基壇が2段構成である。このうち、後者の一例を示す(D・ト-8)。本例の碑銘は、正面に陸軍歩兵+階級+氏名、左右面に経歴を記すものである。なお、日清戦争の清国人俘虜墓2基(D・ロ-5・13)が含まれている。

【E区】(図 6)下段平坦面の最北部に位置し、D区と同様にバイパス工事のさいに移築されたと考えられる一群である。現状では個人墓99基を確認できる。いずれも南面する。碑銘等からみて、平時に病死した兵卒墓のエリアと考えられる。これら個人墓の形態は、いずれも碑身が尖頭方柱式であるけれども、南側2列(1・2列)が基壇1段構成であるのにたいして、北側4列は基壇2段構成である点が異なる。ここでは前者の一例(E・タ-3)と、後者の一例(E・ヘ-2)を示した。碑銘は、正面に(故)階級+氏名を、左右面に経歴を示すものである。石材が花崗岩であることもあって、風化が進み、碑銘を読みがたい例が多い。

【F区】(図 7)下段平坦面の東南部に位置する。現状では個人墓15基を確認できる。いずれも北面する。碑銘・碑身法量からみて、本区は下士墓のエリアと考えられる。これら個人墓の形態は、碑身が尖頭方柱式、基壇が2段構成である。また、石材は、碑身が砂岩、基壇が花崗岩である。碑銘は、正面に階級+氏名、左面に歿年月日と場所を刻するものである。一例を示した(F・ハ-1)。歿年・場所からみて、日清戦争時における戦病死下士墓であることが分かる。

【G区】(図7)下段平坦面の南西部に位置する。現状では個人墓18基を確認できる。いずれも東面する。碑銘・碑身法量からみると、大半は下士墓であるけれども、2例(G・ロ・7・8)は兵卒墓である。これら個人墓の形態は、下士墓の場合、碑身が尖頭方柱式で、基壇が2段構成である。しかし、兵卒墓2例については、碑身が尖頭方柱式であるものの、基壇が1段構成となる点で下士墓と異なる。石材は、碑身が花崗岩もしくは砂岩、基壇が花崗岩である。碑銘・碑身法量等からみて、本区は平時に病死した下士墓のエリアと考えられる。ただし、その中に兵卒墓が含まれる理由は判然としない。

【I区】(図2)B区東側に位置する。ロシア兵捕虜の個人墓1基のみからなる。その形態は、碑身が尖頭方柱式で、基壇が1段構成である。碑身法量・基壇構成等の特徴は兵卒墓にほぼ等しい。石材は碑身が砂岩、基壇が花崗岩である。碑銘は、正面に「露國第四狙撃手聯隊第三中隊列兵 イワン オシホフ ドラトフスキ」と所属・階級・氏名、左面に死亡年月日、右面に生年月日をそれぞれ刻する。碑銘から、捕虜収容所にて病死した日露戦争時のロシア軍捕虜の個人墓であることが分かる。

【H区】(図1・表2)上段平坦面の西側に、南北方向に長い列状に配置された個人墓である。現状では30基を確認できる。これらは、南半の士官墓(H-1~20)と、北半の士官家族墓(H-21~30)に分かれる。士官墓の場合、その形態は尖頭方柱式が多いものの、形態・法量・石材、そして碑銘の形式ともに多様である。歿年からみると、日清戦争による戦死者(H-2・5・13)、日露戦争による戦死者(H3・4・9・11・12・14)、シベリア出兵による戦死者かと思われる例(H-1・17)、その他(H-6・18・19・20)がある。また、北半の士官家族墓は第九聯隊士官の家族(妻子等)の墓碑であって、やはり形態・法量・石材等は多様である(表2)。

まとめ 本墓地は、第九連隊創設以後に連隊が参加した各戦役での戦病死者と、平時での病没・事故死者を埋葬した墓地である。墓地の原状を推定すると、丘陵斜面を上中下段に区画し、上段に士官墓を、中段に下士墓・兵卒墓を、下段に兵卒墓を配置しており、空間的にも階級を明示している。また、墓碑についても、下士墓・兵卒墓は陸軍省による墓碑形態・規格におおむね合致している。

本墓地に埋葬された死者は、基本的に連隊創設以降に限られるはずである。しかし、墓碑の中には第九連隊が創設された明治8(1875)年よりも確実にさかのぼる事例が見いだされるので、初期の埋葬例の中には連隊創設以前に彦根営所で病死した兵を本墓地へ改葬した例が含まれることが分かる。また、明治9~10(1876~77)年の西南戦争でも本連隊では多数の戦病死者が生じたが、彼らの墓碑は十分把握できていない。とはいえ、遺存程度によって碑銘を判読しづらい墓碑も多いので、この点の追及は今後の課題である。さらに、日清戦争での戦病死者については、士官・下士・兵卒のいずれも個人墓を建立している。それらの墓碑は砂岩製で、碑身・基壇の形状も比較的統一されており、一括して製作・建立されたものであろう。それに続く日露戦争での戦病死者は多数に及ぶことから、個人墓ではなく、階級別に合葬碑に埋葬された。それ以降、平時での病没・事故死者の場合は個人墓が建立される一方、戦役・戦争での戦病死者については合葬墓によって対応がなされることになった。

他の陸軍墓地の多くが戦後の墓地整理等によって個人墓が失われたなかで、本墓地は戦後の移転等で旧状を改変されているものの、個人墓をふくめて墓地じたいが比較的良好な状態で維持されている。この点で貴重な「戦争遺跡」といえよう。(辻川)

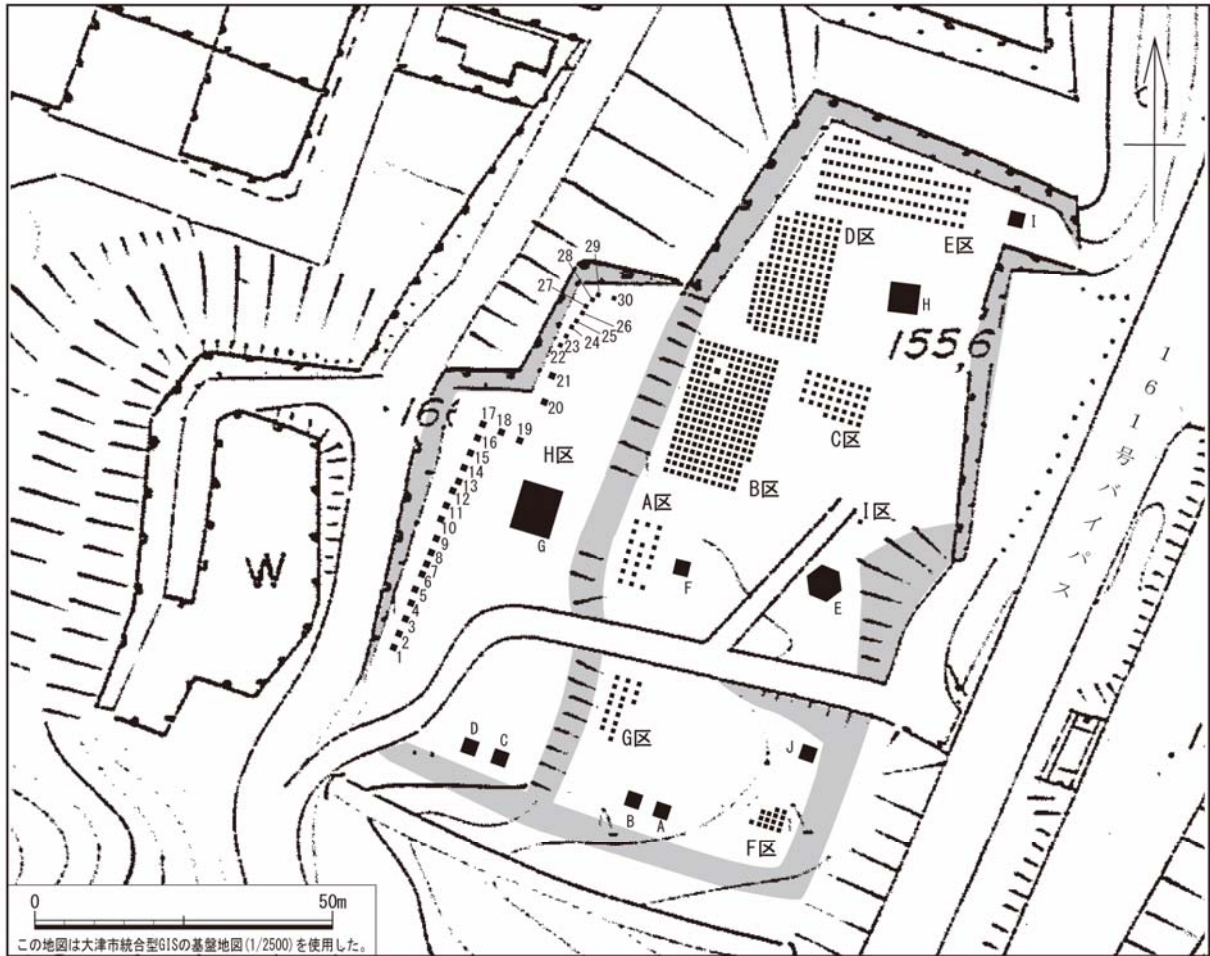


図1 墓地の配置（現状）

表1 合葬墓・慰霊施設一覧（現状） *番号は上図に対応する。

番号	碑銘		
	正面	左面	裏面
A	明治三十七八年戦役下士戦病死者合葬碑	明治三十九年十一月建之	
B	明治三十七八年戦役准士官戦病死者合葬碑	明治三十九年十一月建之	
C	大正四年乃至九年戦役戦病死者之碑	大正十一年六月 建之	
D	明治三十七八年戦役持校同相当官戦病死者合葬碑	明治三十九年十一月建之	
E	太子地藏尊		
F	大東亜戦戦没者之碑		昭和四十一年建立 滋賀県遺族会
G	日清日露第一次第二次世界大戦各戦役戦没之英霊供養塔		昭和五十五年五月十日 / 滋賀県 / 大津市 / 護持奉賛會
H	超日月光霊土		
I	明治三十七八年戦役兵卒戦病死者合葬碑	明治三十九年十一月建之	
J	天 霊土		建立 昭和五十二年五月吉日

